お月さまいくつ

北原白秋

お月(つき)さまいくつ。
十三七(じふさんなな)つ。
まだ年(とし)や若(わか)いな。
あの子(こ)を産(う)んで、
この子(こ)を産(う)んで、
だアれに抱(だ)かしよ。
お万(まん)に抱(だ)かしよ。
お万(まん)は何処(どこ)へ往(い)た。
油買(あぶらか)ひに茶買(ちやか)ひに。
油屋(あぶらや)の縁(えん)で、
氷(こほり)が張(は)つて、

油一升こぼした。
その油どうした。
太郎どんの犬と
次郎どんの犬と、
みんな嘗めてしまつた。
その犬どうした。
太鼓に張つて、
あつちの方でもどんどんどん。
こつちの方でもどんどんどん。（東京）

この「お月さまいくつ」の謡は、みなさんがよく御

存じです。私たちも子供の時は、よく紅（あか）い円（まる）いお月様を拝みに出ては、いつも手拍子をうつては歌つたものでした。この童謡は国国（くにぐに）で色色（いろいろ）と歌ひくづされてゐます。然（しか）し、みんなあの紅（あか）い円いつやつやしたお月様を、若い綺麗（きれい）な小母（をば）さまだと思つてゐます。まつたくさう思へますものね。

お月（つき）さんぽつち。
あなたはいくつ。
十三七（じふさんなな）つ。
そりやまだ若（わか）いに。

紅鉄漿（べにかね）つけて、
お嫁入（よめい）りなされ。（伊勢）

・

ののさまどっち。
いばらのかげで、
ねんねを抱（だ）いて、
花（はな）つんでござれ。（越後）

・

あとさんいくつ。
十三一（じふさんひと）つ。
まだ年若（としわか）いの。

今度京へ上つて、
藁の袴織つて着しよ。（紀伊）

・

お月さんいくつ。
十三七つ。
まだ年は若い。
七折着せて、
おんどきよへのぼしよ。
おんどきよの道で、
尾のない鳥と、
尾のある鳥と、

けいっちぃや、あら、
きいようようと鳴いたとさ。（伊勢）
「おんどきよへ」とは、「今度京へ」といふのがなまつたのです。

・

お月さまいくつ。
十三七つ。
そりやちと若いに。
お御堂の水を、
どうどと汲もに。（美濃）

・

お月さま。お年はいくつ。
十三七つ。
お若いことや。
お馬に乗つて、
ジヤンコジヤンコとおいで。（尾張）

かういふ風に、「そりやまだ若いに。」と、みんな歌つてゐるから面白いのです。京へ上つたり、紅かねつけたり、お嫁入りしたり、赤ん坊を生んだりしてゐます。お馬のジヤンコジヤンコもおもしろいでせう。それにまた、「そりやまだ若い。若船に乗つて、唐まで渡

れ。」（紀伊）といふのもあります。それから少し変つてゐるのに、一寸西洋の童謡見たやうなのがあります。それは珍らしいものです。

お月様いくつ。
十三七つ。
まだ年は若いど。
お月様の後へ、
小いちやつけ和尚が、
滑橋 をかけて、
お月様拝むとて、

ずるずるすべつた。（下総）

これは、空のけしきが其のままに歌はれてゐます。小さい和尚さんは白い星か薄(うす)い霧のやうな星の雲かでせう。滑橋(すべりばし)もさうした雲のながれでせう。天の川のやうな。ずるずる滑るところがをかしいではありませんか。

それから、その綺麗(きれい)な若いお月様の小母さまに、みんながお飯(まんま)を見せびらかしたり、またいろんなものをせびつたりします。やはり子供の小母さまですから。

お月様(つきさま)。
観音堂(くわんのんだう)下(お)りて、
飯(まんま)上(あ)がれ。
飯(まんま)はいやいや。
あんもなら三つくりよ。（信濃）

・

お月様(つきさま)。お月様(つきさま)。
赤(あか)い飯(まんま)いやいや。
白(しろ)い飯(まんま)いやいや。
銭形金形(ぜにがたかねがた)ついた
お守(まも)りくんさんしよ。（岩代）

・
あとさん。なんまいだ。
ぜぜ一文（もん）おくれ。
油（あぶら）買（か）つて進（しん）じよ。（肥前）

・
どうでやさん。どうでやさん。
赤（あか）い衣服（べべ）下（くだ）んせ。
白（しろ）い衣服（べべ）下（くだ）んせ。（陸中）

そのお月様は、紅（あか）いのに桃色だと云つたとて、プリプリ怒つたのもあります。

お月様桃色(つきさまももいろ)。
誰(だれ)が云(い)つた。
海女(あま)が云(い)うた。
海女(あま)の口(くち)ひきさけ。（尾張）

それから、

大事(だいじ)なお月(つき)さま、
雲(くも)めがかくす。
とても隠(かく)すなら、

金屏風（きんびやうぶ）でかくせ。（東京）

といふのがありませう。ほんとに金屏風でなくては、あの若い小母さまには似合はないでせうね。いかにも昔のお江戸の子供が謡つたやうでせう。気象（きしやう）が大きくておほまかで、張（はり）があつて、派出（はで）で。

「兎（うさぎ）うさぎ」といふのも御存じでせうね。

兎（うさぎ）。うさぎ。
何（なに）見（み）て跳（は）ねる。
十五夜（じふごや）お月（つき）さま

見(み)て跳(は)ねる。ピヨン〳〵。

ほんとに、お月夜の兎のよろこびと云つたらありません。両耳を立てて、草の香の深い中から、ピヨン〳〵と跳ねて飛んで出る、あの白い綿のやうな兎さんもかはいいものです。それにしても、あのまアるいお月さまの中には、いつも兎が杵(きね)をもつて餅を搗(つ)いてゐる筈でしたね。

底本：「日本の名随筆58　月」作品社
１９８７（昭和62）年８月25日第1刷発行
底本の親本：「北原白秋全集　第一六巻」岩波書店
１９８５（昭和60）年６月
入力：土屋隆
校正：門田裕志
２００６年9月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。